

あの年の暮れ

一段落した仕事を措いて母の病室を覗いて見る。初冬の日の暮れかたの速いこと、窓の外、ついさつきまでの澄み切った青空とトキ色の雲はもうどこにもなく、黒くなった窓ガラスに白衣姿の自分が映っている。

枕頭の壁に取り付けられた電灯の投げる鈍い光の輪のなかに、やつれた母が一握りになって寝ている。鼻筋が尖って蒼白い。年齢の割りには多い灰色の髪が氷枕を包んだタオルに乱れて痛々しい。八十三歳、母は老いた。萎びて小さくなった。そしていま、病んでますます衰弱している。

腸閉塞の手術後三日目、まだ排ガスが無くて胃管は入ったままである。しかし、医者としての私は母の病気を死病とは考えていない。病篤く点滴で命をつないでいるのではあるけれど、経過としては悪くはない、大丈夫、ここは絶対に恢復する筈だと思っている。

自分の母親の開腹手術をした経験を持つ外科医がどれほどあるか私は知らない。一般に肉親の手術は平静な気持ちでは出来ないから先輩か同僚に執刀を頼むのが普通だと、以前に聞いたことはある。しかし、私はもしも自分がそんな事態に置かれたら、誰にも頼むまいと思っていた。手術の適応の有無については情がからんで判断を誤ることは大いにありうるだろう。しかし、手術自体は一連の技術であって情の這入り込む余地は無い。精一杯持てる技倆を發揮すればそれで良いと、そう思っていた。

その年の暮れ、十二月七日の日曜日、昼食をほとんど残した母が実は朝からまたしても腹が痛いのだという。数年前からこの痛みが時々あったらしい。たいていは便秘が先行する。岡山で独り住まいだったころ、三回ばかり救急車を頼んで入院したことがある。その度に一晩で治っていたらしい。大腸癌が心配で二回目の入院の時、岡山日赤の放射線科の先輩に注腸造影をして貰った。幸いにして癌は無く、昔の虫垂炎手術の痕に癒着があつて、時にそれが通らなくなるのが原因と判った。悪性のものではないと判るとお互い剥離手術は億劫でそのままになっていた。ただし、腹痛発作が起こる度にお隣りのお世話になるのが、いかにも年寄りをほったらかしにしている様でどうにも具合が悪い。つまり、母の独り暮らしはもはや無理になって来ていたのである。

嫌がる母をなつかば騙すようにしてようやく鎌倉に連れては来たものの、若い時と違って恠え性の無くなった母は、苦痛が去ると他人の世話になったこともすぐに忘れて独り暮らしを続けたがった。永いことお世話になりましたけど今度の日曜日には岡山に帰らせてもらいます、というのが口癖になった。翌朝はすっかり忘れていたのではあるが、三日もす

ると思い詰めた表情でまたそういうのである。母もそうだろうがこちらも辛かった。

この年十月にも腹痛腹満に加えて嘔吐を繰り返したが、この時も半日辛抱して貰ったら自然に通つたらしくすさまじい下痢とともに治ってしまった。老衰した母が打ち倒された様になって苦悶する様子を見せられると私も妻も惑乱するし、そこいらが滅茶苦茶に汚れもする。それでもほぼ一日で緩解するのが例なので、入院させるよりは様子を見ていたいという考えて、結局母に我慢を強いてしまうことになる。

なまじ自分が医者であるばかりに、母にも、そして姑の世話に明け暮れる妻にも、要らざる苦痛を強いて来た事になる。二人に済まない事をしたと思う。

暮れの日曜日。今度は、しかし、痛みも悪心嘔吐も今までになく強いし執拗である。陽が傾いても一向に良くならない。上腹部は陥没して曲がった背中にくっつくくらいなのに、臍から下は布袋のように膨隆し、皮下脂肪の全く無い薄い腹壁には強い蠕動不穏が透けて見える。これはいけないと思った。

耳許で手術しようかというところ、か細い声で手術して貰って早く治りたいという。いままでの母なら周囲に気兼ねして、騒がないでくれ、もうちょっと待ってくれ、と必ずそういうたものだった。自分の子どもにも面倒をかけるのを遠慮するひとだった。母のこういう気持ちにはとてもよく解る。痛いから手術はいやだななどというのではなくて、自分が我慢しさえすれば他人に迷惑がかからなくて済むのならこのままでいたい、大騒ぎはして欲しくないのである。自分だけの、あるいは自分の家族だけの事情の如き、いわばワタクシごとで他の人を煩わせたくないという、他人を憚る気持ちは私自身にも色濃くあって、それはほかならぬこの母から受け継いだものらしい。折角の日曜日、私も入院だ、手術だ、と騒ぎ立てて勤務先の仲間を煩わせたくはない。しかし、常々自我を抑えて必要以上に遠慮し貧乏籤を引いてしまう母が、今は苦痛のあまりもう我慢が出来ないといっている。医者は自分の家族の病気を診療しない方がいいというのにはいろいろ理由があるだろうが、惻隱の情やら希望的観測やら当惑、膨れ上がった責任感その他もろもろの感情が入り混じって判断を誤り易いのは本当だと思った。思い惑った挙句、勤め先の病院に電話して手術室の態勢を訊いてみる気になったのは、母のこの腸閉塞が今までそうであった様に、幸いにして自然緩解したとしてもいずれまた同じ様な事態が起こるに違いない、それももつと都合の悪い時に、意地悪く不意を狙って来るかもしれないと思いつたからだ。現在の状態が手術の絶対適応だからというよりも、この先また何度も同じ困惑の中に置かれるのはかなわないと感じた時、身体が動いていた。情けないことだが真実、そうだった。

電話してみると手術室主任が折りよく外来当直に当たっていて準備はすぐ出来るし、助手の中山先生もすぐ来てくれるという。話が逆のようだけれど自分の決意次第で手術はすぐ出来ると聞いて、そこで初めてイマしかない、明日では駄目なんだとはっきり認識した。

手配の電話を置くと妻が来ていう。

「良かった、手術することにしたのね。早苗のことがあるから、早く手術して貰った方がいいと私も思っていたの」

胸が詰まって返事は出来なかったが顔を見合わせただけで気持は十分通じている。亡くなった娘のことが大きな石を載せられてでもいるかのようにつきも念頭にあるのは私も妻と同じである。娘の喘息発作をいつものことと軽く見て、朝の食卓で娘の顔をちらと見たきり出勤し、夕方勤務を終えたその足で頼まれていた老人病院の宿直にまわってしまった私は、娘を一晚中苦しませた挙句、心肺停止の状態に陥った娘に翌朝、病院の救急処置室で対面することになった。それが半年前、この年の五月一日のことである。私達は立ち直ってはいなかったし、この先晴れやかに笑える日がまた来るとも到底思えなかった。苦しかったであろう娘に何もしてやらずのめのめと生き延びている自分が許せなくて、しかし、どうにもならずただ毎日を暗澹と過ごしていた。

母の病気で再び同じ過ちを繰り返して手遅れにしてはならない・・そのことは十分解っているつもりだったが、しかし明日ではまたしても遅すぎたことが本当に解つたのは開腹してからであった。

盲腸と回腸々間膜の間の癒着が長い経過の中で索状にループを作り、その下に入り込んだ回腸が絞扼されて紫色に緊満している。開腹術後年月が経ったあとの腸管癒着でよくあるパターンである。捻転に等しい完全な閉塞でここまでくれば自然に解除されることはもうあり得ない。あと数時間遅れていたら腸管壊死から穿孔して汎発性腹膜炎を起こす。そうなれば仮に広汎小腸切除が出来たとしても年齢、衰弱の具合から予後はほとんど絶望的である。明日などといっていたら帰趨はもつと電撃的だったに違いない。

絞扼を解除して血行が回復するのを確認し、再癒着を防ぐ意味で漿膜の傷ついた回腸の一部を切除したあと端々吻合して手術を終えた時、私は心のうちで今度は間に合った、善かった、間に合った、と阿呆のように繰り返して、幸福だった。母親の命を救えたことが嬉しかったばかりではなく、娘の死の重苦しい悔恨と償いきれない自責の念を、何者かに背中を押されるようにしてではあるけれど、今度は教訓として生かせたという想いが何よりも救いだつた。間に合つて、本当に善かった。

もし母までも手遅れにしていたらと考えると、あの時瀬戸際に立たされていたのは母ばかりではなく、実は私自身であつたと、今これを書きながら慄然とする。